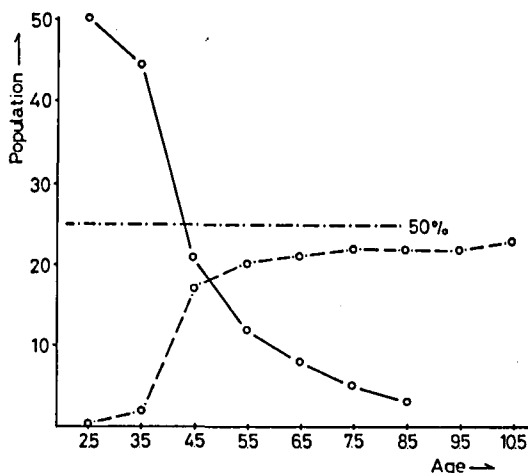




第 1 図

調査結果

'73年現在、湯河原町一帯には5群の生息が認められ、そのうちT群とP群を調査の対象とした。ここではT群出自のオス36頭、P群出自のオス14頭、あわせて50頭の追跡結果を報告する。これらの個体は長期のもので8年、短期のもので5年の継続調査がなされてきた。第1図はその結果をグラフにしたものである。図中、実線は自群に残った個体数を示し、破線は他群に加入した個体数の累積を示している。年齢が4.5才から5.5才になると、他群出自の個体数が自群出自の同年令の個体数をうまわった構成となることがわかる。しかし、5.5才以上になると加入が急に減少し、9.5才まで伸びはほとんどみられなくなる。

結局、50%弱の相当数の個体が離脱後観察不可能となる。うちわけとして、1)死亡(捕獲をふくむ)、2)一定時期完全に単独化ないし群れと独立する、3)他の遠く離れた群れに加入している、の3通りが考えられる。事実、最後の例を筆者らは目撃しており、第2の例がその途中の過程である場合がないとはいえない。

オスグループについて

群れに加入したか否かは一律には判定できない。ここでは発情期の一時的な群れへの接近はふくまないものとした。他の群れへの加入の過程をみると、かならずしも一様ではないが、他のオスとの認知関係に伴う順位関係の成立を条件にしているように考えられる。このような個体関係の成立をもって、オスグループの成立とすると、オスグループと周辺部の周辺落ちたオスよりなるグループとは異出自混成グループという点で明確に区別できうるものとなる。オスグループは年齢構成のうえで、同年令に近い個体のみによるものから、一定の年齢差をもつものまで多種多様であった。グループのサイズからみると、後者の場合がより大きなサイズを保ってお

り、同個体数のグループならば、やはり後者の構成のほうがより安定したグループを形成していた。この構成は、一般的なニホンザルの群れから、コードモとメスを除いたオスの構成としばしば類似したものである。

以上、湯河原地域に生息するニホンザルのオスの離脱と加入について概説したが、中年令以上のオトナオスの動態を考慮したとき、オス間の関係が思いもよぬ広い生活空間を舞台としてなりたっていることが想定される。より強固な結節部に端を発したオスの糸は、小さな結節点をつくりながら、いつかメスたちの強固な結節部にもどってゆく。そのかぎりでは、より一般的な哺乳類のレベルに近いものであるかもしれない。

奥湯河原に生息する野生ニホンザルの5群間の関係について

一個体の離脱・加入の面からのアプローチ

福田 史夫(マカク研究会)

神奈川県足柄下郡(箱根町・湯河原町)一帯には、'73年2月現在、T・P・H・S・Iの5群が生息する。T・P・Sの3群は餌付けの進行度合の違いが認められるが、3群とも観察が容易な群れである。

'68年4月よりT群の若年オス個体に入れ墨によるマーキングを施し、離脱後の追跡調査の確実化をはかった。

本年度の報告は、同一地域個体群内の上記の5群間の関係を、T群のオスに焦点をあてて、その離脱と他の群れへの加入の面から、今までのデータをまとめたものである。なお、本報告は'65年4月から'73年2月までのものである。

1. 若年オス

'64~'68年生れのものを若年オスとして扱った。'63年以前は出生数が不明確なのでオトナオスとして扱った。

この5年間のオスの出生数は33頭(このうち2頭死亡)で28頭が離脱した。4才が離脱のピークで、4才までに70%が、5才までに85%が離脱した。離脱の時期は5、6月の出産期で半数以上(55%)が離脱した。しかし、交尾期に離脱した個体は10%弱であった。

T群を離脱した28頭の若年オスのうち、17頭が同一地域個体群内の4群に加入し、11頭が不明¹⁾となった。しかし、この不明個体のうち2頭²⁾は60数キロ遠方の他の

¹⁾ 不明というのは、他の4群にも、また周辺にも確認されなかった場合である。

²⁾ 2頭とも'65年生れて、マーキングされている。離脱の年は1頭は'69年6月であり、1頭は'71年8月であった。現在、この2頭は波勝崎野猿公園内のケージの中に入っている。

地域個体群内の群れに加入していたことが確認された。

加入の時期としては、交尾期中の11月～2月に60%以上の個体が他の群れに接近し加入していた。

次に、離脱から加入までの期間にどのような現象が観察されたかという点、離脱—加入というパイプを通過するためには、加入する群れの個体と顔見知りになる必要がある。

'69年8月には、T・P両群の若年オスからなる一時的なオス・グループ¹⁾が形成された。同じ様な現象は'70年7・8月、'71年7・8月に観察された。また'72年7月にはT・P・Hの3群からなるオス・グループが観察された。

2. オトナオス

'65年4月から'73年2月までの期間、T群のオトナオス個体は15頭であった。このうち1頭は死亡、また4頭²⁾は15頭から除外した。

上記期間中にT群から離脱したオス個体は13頭であった。そのためほとんどすべてのオトナオスが入れ変わった。

この離脱個体のうち、同一地域個体群内の4群に加入したのは8頭であった。残りの4頭は不明となっている。オトナオスの場合の離脱の時期は、7・8月の夏期であり、加入する時期は11・12月の交尾期のみに限られていた。

T群を離脱後同一地域個体群内の他の4群に加入した割合は、若年では17/28で60.7%であり、オトナオスでは8/13で61.5%であった。このことより離脱した個体の61%近くは同一地域個体群の4群に加入していることがわかった。

また、離脱した個体のうち、若年では11/28がP群に加入していた。同一地域個体群内の4群のうちで、若年の場合、P群に加入する割合が最も高かった。このことはP群の餌場がT群の行動域の中に含まれていることにより、両群の若年オスが顔見知りになる機会が、他の3群よりも多かったことによるとと思われる。また、オスのほとんどすべては離脱し、離脱した個体は出生群へ再び戻るということはないように思われる。また、群れ内の滞在期間が、若年にしてもオトナにしても4・5年、長くとも6・7年ということを考えると、相当高い割合でインセスト・タブーが守られていると考えられる。

¹⁾ T群の2頭とP群の2頭よりでき上がったグループであった。T群の2頭はこの年の12月にP群に加入した。P群の2頭のうち1頭は再び戻ったが、'72年3月にT群の周辺オスとなった。P群の他の1頭は不明となった。

²⁾ この4頭はT・P・H・Sの4群内を数年おきに渡り歩いていた。

ニホンザル個体群に対する人類の活動とその影響に関する調査研究

千葉 徳爾(愛知大・文)

ニホンザルの生活する環境としての人類の居住領域の変動と、それに応ずるサル個体群の消長を明らかにする目的で、つぎの2つの調査研究を行なった。48年度も同じものを継続する予定である。

1. ニホンザル個体群の分布に関する歴史的資料の蒐集

この分野については、つぎの3部門にわけて資料をあつめつつある。

(1)考古学的資料 全国各地の考古学的発掘調査の報告から、ニホンザルの棲息を証する骨・土偶、その他の資料を求め、その分布・出土状態・時代などについて、約3～4×10³年以前のニホンザル分布状況と、当時の人類活動との関係についての知識を集積する。

現在までの結果では、北海道をのぞく3大島にまたがって骨の出土があり、とくに縄文後期の遺跡からの量が多い。ことに東日本でこの傾向がみられ、考古学者の中にはこの現象に注目して、サル狩猟文化圏を考える人もある³⁾。

(2)地誌的資料 各地の近世地誌の中に記述される動植物の中から、ニホンザル関係の記載を求め、その定性的な居住範囲を知り、これを現代の分布と対比する。

現在までのところでは、鹿児島県の大部分・山口県的主要部・岐阜県飛騨地方について、19世紀末の定性的棲息地の分布が知られた。いずれの地域でも、現代の分布地とくらべてかなり分布地点の数が多くなっている。新しく棲息地となったところは皆無といってよい。

(3)ききとり資料 各地の老猟師や生物研究家を訪ね、分布上の知見、とくに群の滅亡とその事情についてききとりを行なうほか、実地の観察を試みる。

これまでにつぎの地区でききとりを行なった。徳島県祖谷山地・石川県手取川上流・新潟県山形県の境界山地・日光市周辺の4カ所について約10名からききとりを行っている。その成果としてつぎの諸点が明らかになった。

i) 西日本各地の猟師は、古来ニホンザルを撃たないという者が多い。禁忌として守られる。

ii) しかし、祖谷山のような奥地では、それを捕獲し、また全滅させた記憶をもつ者があり、禁忌とされなかった。

iii) 東日本でも日光市までは、ニホンザルを射撃することは禁忌となっていたが、実際には捕獲していた者が

³⁾ 早大、金子浩昌氏。